週末に「帰る」場所

―台北の「リトル・インドネシア」―

柴　山　　元*

夕暮れの屋台で

ある日曜の夕方，筆者は夕飯に何を食べようかと思い悩み，街を彷徨っていた．傾きかけた太陽が，まだ沈みたくないと言わんばかりに最後の力を振り絞り，路地に立ち並ぶ店々を橙色の光で照らす．

「バクソ（*bakso*）[1]！　バクソ！　ガドガド（*gado-gado*）[2] もあるよ！」

時計の針は 6 時半を指している．日が落ちるとともに，客引きの数も増える．

「サテ（*sate*）[3] はいかが！」

道端でサテを焼く煙が目に染みる．あたりにインドネシアの匂いが漂う（写真 1）．

次々と声をかけてくる客引きの言葉に惑わされる．腹が減るにつれて，優柔不断な自分にだんだんと嫌気がさしてくる．だが，どんなうまいものを食おうかと悩むこの時間は，ワクワクのひとときでもある．

「帰ってきたね．」

同行していたインドネシア出身の友人が，目の前の鍋で揚げられるアヤム・ゴレン（*ayam goreng*）[4] を凝視しながら呟く．そうだ，「帰ってきた」のだ．きっと，だからこそ余計にワクワクするのだろう．

だが，筆者と友人が「帰ってきた」場所はインドネシアのどこかではない．ふと後ろを振り向くと，横断歩道の向こう側に夕日で照らされて真っ赤になった台北駅の駅舎が見えた．

台湾の「インドネシア」

筆者が「帰ってきた」のは，台北駅の東隣に位置する小さな街区である．ここは「リト

写真 1　焼きあがったサテ
右のビニール袋に入っているのはピーナツソース（筆者撮影）．

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）牛肉のすり身から作られたインドネシア風肉団子．
2）数種類の野菜を茹でたものに唐辛子入りのピーナツソースをかけたもの．インドネシア版野菜サラダ．
3）鶏肉，羊肉，牛肉などを小さく切って竹串に刺して焼いたもの．インドネシア風の串焼き．ピーナツをベースにした唐辛子入りソースにつけて食べる．
4）インドネシア風フライドチキン．

写真 2　リトル・インドネシアの屋台
インドネシア語やジャワ語が飛び交う（筆者撮影）．

ル・インドネシア」（標準中国語では「小印尼 *xiao Yinni*」）と呼ばれている．その名のとおり，インドネシアの雑貨や食材を扱う商店とレストランが軒を連ね，週末になるとインドネシア出身者で大いに賑わう．横断歩道を隔てて，台北駅と目と鼻の先に位置しているにもかかわらず，台湾人がここを訪れる姿は滅多に目にすることがない．そこは，あたかも異国のように台湾社会から隔絶された空間になっている（写真 2）．

「あんたは本当に物好きだね，こんなところへ来て．」

アヤム・ゴレンを運んできた店員が，筆者を見ておもむろにそう言った．たしかに，リトル・インドネシアを訪れる台湾人をほとんど見たことがない（日本人の姿は一度も見たことがない！）．店員はこう続けた．

「多くの台湾人は，トコ・インドが集まるこの辺にあまり良い印象を抱いていないんだ．ゴミが散らかっていて，めちゃくちゃだから．」

たしかに，数時間おきに清掃員が回ってきて床を綺麗にしていく台北駅構内とは違って，ここはゴミが散らかり放題である．台湾人がこのめちゃくちゃな場所に近づかないのも頷ける．だが，物好きな筆者としては，このめちゃくちゃな雰囲気に，むしろ居心地の良さを感じる．

あちこちでインドネシア語が飛び交い，肉を焼く煙がもくもくと天にのぼる．日本の景色と似通った台北のコンクリートジャングルの中に突然と現れる「インドネシア」．そこにおもしろさを感じた筆者は，毎週末ここへ「帰る」ようになった．

台湾のインドネシア人

台北の町を歩いていると，インドネシア人の姿を頻繁に目にする．公園に行けば，ヒジャブをつけたインドネシア人女性が台湾人高齢者を乗せた車椅子を押す姿をよく目にする．休日に駅前へ行けば，ベンチに腰かけてインドネシア語やジャワ語で談笑している若者の姿を目にする．現代の台湾社会では，インドネシア人が町を歩く光景は，すでに当たり前になっている．

現在，台湾には 26 万人を超えるインドネシア人が居住している．そのうち 25 万人弱は，台湾に出稼ぎに来た労働移民である．その多くは女性であり，台湾人家庭に住み込みで働き，介護・家事労働に従事する．台湾の人口が 2,360 万人ほどであるから，台湾の人口の 1%ほどがインドネシア人ということになる．

労働移民のほかに，国際結婚をきっかけとしてインドネシアから台湾に移動した婚姻移

民の存在も忘れてはならない．婚姻移民は累計で 3 万人ほどになる．さらに，近年では留学生も増加しつつあり，その数は 1 万人を超えている．このほかにも，インドネシアでの排華的政策から逃れるために，1960 年代に台湾へ「帰国」した「帰国華僑」も存在する［玉置 2020］．このように，長い時間をかけて多くのインドネシア人が台湾へ移り住んできた．

トコ・インド

リトル・インドネシアには，インドネシア商店が立ち並ぶ．インドネシア商店は「トコ・インド（*toko Indo*）」という愛称でインドネシア出身者から親しまれている．トコ・インドという言葉は，もともとはインドネシアの店（*toko*）という意味である．だが，台湾のトコ・インドには，商店のほかにレストランの機能を備えた店舗が多い．そのため，インドネシアの雑貨や食材を売る商店だけでなく，インドネシア料理を提供する店も，総じてトコ・インドと呼ばれる．

トコ・インドは台湾全土に点在している．台北や台中といった都市部であれば主要駅周辺に店が集まっており，少し町外れに行っても駅周辺や商店街にぽつりと店を出していることが多い．統計がないために総数は不明であるが，一説には台湾全土に少なくとも 300 のトコ・インドが存在するという［洪 2011: 74］．

トコ・インドにはさまざまな人々が集う．トコ・インドを営んでいるのは，比較的早期に台湾へ移動した帰国華僑が多い．台湾人と結婚した婚姻移民がトコ・インドを営むケースも少なくない．一方，顧客の大部分を占めるのは労働移民だ．そして，留学生がアルバイトとして働くケースも多くみられる．

「土日だけ手伝いに来るのさ．平日は工場勤務よ．毎日仕事ってわけさ，楽しいからいいけど．」

店員がエス･チェンドル（*es cendol*）[5] を運びながらそう言った．話によると，彼は東ジャワから出稼ぎに来た労働移民で，工場での仕事がない土日だけトコ・インドの手伝いに来るという．土日のトコ・インドは客でいっぱいになる．インドネシア人が集まり，インドネシア語が飛び交い，インドネシア人が，インドネシア人にインドネシア料理を提供する．週末のトコ・インドには「インドネシア」が再現されるのである．

週末のシンデレラ

しかし，そのトコ・インドも，賑わいをみせるのは週末だけのことである．顧客の大部分を占める労働移民は，仕事がある月曜から金曜（もしくは土曜）までの間は，自由に出歩く時間を確保できない．それだけでなく，職場や居住スペース（家事・介護労働者であれば，大多数は雇用主と同居している）ではオシャレをすることもできず，プライベートな空間を確保することすら困難である．

その反動か，普段は作業着かＴシャツし

5）ココナッツ・ミルク，緑色に着色したゼリー，かき氷，小豆などを混ぜたインドネシアの甘味．

か身につけない彼らは，週末になると着飾って町へ繰り出すのである．魔法にかけられたかのようにオシャレをして，息苦しい職場を抜け出し，友だちが集まる台北駅へ行き，楽しい時間を過ごす．トコ・インドで故郷の味にありつき，カラオケで懐メロを歌い，ギターをかき鳴らし，踊り狂う．門限ギリギリまで存分に楽しむ彼らは，まるでシンデレラのようである［Lan 2006: 169］．

夕食を終えて，筆者と友人は台北駅のロビーへ移動した．すでに夜 8 時前だ．日曜の夜，駅の人通りはまばらである．とりあえずロビーの床に座る．これも「インドネシア式」である．土日に台北駅に集まるインドネシア人は，なぜか皆ロビーに集まり，床に座っておしゃべりに興じる．この光景も，すでに台北では当たり前のものとなっている（写真 3）．

床に座った途端，友人のマシンガントークが炸裂した．言い残すことがないよう，思いついたことはなんでも口にする．門限が近づいているのだ．

写真 3　台北駅のロビー
休日にはインドネシア人が床に座って談笑する姿がみられる（筆者撮影）．

移民たちの「ホーム」

「トコ・インドってのは，故郷を思い出せる場所なのさ．バクソとかサテとかを食うと懐かしくなるわけよ．まるで家にいるみたいなもんよ．ホームだね，ホーム．」

なるほど，「ホーム」か．たしかに，彼らがトコ・インドでみせるくつろぎといえば，相当なものである．店に来て飲み物を 1 杯注文したきり，何時間も席を立たない人はザラである．ずっとスマートフォンをいじるか，隣の客とエンドレスなおしゃべりに興じるかしている．かといって，店員もこれを特に咎めることはない．むしろ，店員も積極的にそのおしゃべりに割って入っている．「ホーム」と呼べるほどくつろげる空間なのは頷ける．

先述のとおり，トコ・インドにはさまざまな人が集まる．居留ステイタスもエスニシティもさまざまである．なかには，インドネシア国籍をすでに手放して，中華民国籍（台湾籍）を得た人もいる．これだけバラバラな彼らに唯一共通しているのは，インドネシア出身という点だ．トコ・インドという「ホーム」は，インドネシアという結集の軸があって初めて成り立つ場所なのだ．

ひととおり語り終えると，友人は一瞬名残惜しそうな顔をみせた．それを打ち消すかのようにとびきりの笑顔を作り，ゆっくりと立ち上がった．

友人は，ギターケースからギターを取り出し，インドネシア語で軽快に弾き語りを始めた．周りにいたインドネシア人たちが集まってきて，手拍子を加える（写真 4）．

ラブソングを何曲か歌ったのち，最後に

写真 4　ロビーで熱唱する人
週末の台北駅のロビーは一瞬にしてコンサート会場に変わる（筆者撮影）.

愛国歌「タナ・アイルク（*Tanah airku* 我が祖国）」をかっこよく現代風にアレンジして歌ってくれた．先ほどまで手拍子をしていた周りの人も，これにつられて口ずさむ.

Tanah airku tidak kulupakan
Kan terkenang selama hidupku
Biarpun saya pergi jauh
Tidak kan hilang dari kalbu
Tanahku yang kucintai
Engkau kuhargai

我が祖国を決して忘れない
今まで生きてきた思い出が詰まった国
遠く異国へ行ったとしても
心の中から消えることは決してない
我が愛する祖国よ
大切な祖国よ

週末の夜，祖国を想う歌声が台北駅に響いた.

引　用　文　献

洪　珮瑜．2011.「族群產業與網絡－以印尼商店為例」國立中央大學客家社會文化研究所碩士論文.

Lan, Pei-Chia. 2006. *Global Cinderellas: migrant domestics and newly rich employers in Taiwan*. Durham: Duke University Press.

玉置充子．2020.「台湾と東南アジア－『南向』をめぐる現状と展望」奈倉京子編『中華世界を読む』東方書店.